

17. 「金閣寺」(三島由紀夫, 1956年), 18. 「パニック」(開高健, 1957年), 19. 「点と線」(松本清張, 1958年2月), 20. 「不意の唾」(大江健三郎, 1958年), 21. 「木々は緑か」(吉行淳之介, 1960年), 22. 「雁の寺」(水上勉, 1961年3月), 23. 「初夜」(三浦哲郎, 1961年11月), 24. 「砂の女」(安部公房, 1962年), 25. 「山本五十六」(阿川弘之, 1965年), 26. 「青春の蹉跎」(石川達三, 1968年), 27. 「塩狩峠」(三浦綾子, 1968年), 28. 「女武者」(池波正太郎, 1972年), 29. 「まゆ墨の金ちゃん」(池波正太郎, 1972年), 30. 「太郎物語高校編」(曾野綾子, 1973年)

『新潮文庫の100冊』は、一般の読者になじみの多い有名作品が選ばれており、小説テキストにおける典型的な使用例を見出せると期待できる。収録量としては多いと言えないかもしれないが、当面对象とする「発話・思考動詞+て」の傾向を考察するのに十分な量が得られ、様々な作品に共通した使用傾向が見出せると判断する。「ビルマの罫琴」における「コウ」「ソウ」の後続内容は、少し異なる典型例が得られたが、これら典型例も意味があり、含めてもいいと考えられる。

- ② 拙稿(2014)「小説における指示副詞「コウ」「ソウ」の後続表現——発話動詞・思考動詞に係る場合——」『表現研究』(100)では、「た。」の場合の考察について、後続の一文の内容を「I 同じ場面が続く場合」と「II 別の場面に変わる場合」に2分類し、また「I」の下位分類として、「発話・思考内容の説明」「行動主体(発話者・思考者)の発話・思考の続き」「行動主体のその他の動作」「他者の反応」「行動主体の状態」「他者の状態」の6種に分けている。
- ③ この3例はいずれも「ソウ」の場合で、「A(発話・思考の主体)+発話・思考動詞「て」+行動～と、B(別の主体)～」は2例(2例とも「痴人の愛」にある)、「A+発話・思考動詞「て」+行動～が、B～」は1例(「二十四の瞳」にある)である。
- ④ 「ビルマの罫琴」の地の文において、発話・思考動詞が後続する場合の「コウ」と「ソウ」について、「コウ」は26例で、「ソウ」は22例である。【表1】の全体の数から見れば、「コウ」の比率は非常に高い。また、「コウ」の場合に、発話動詞は23例で、思考動詞は3例のみであるのに対し、「ソウ」の場合に、発話動詞は9例で、思考動詞は13例である。
- ⑤ その後続の表現として、「ソウ」は130例中、「見る」「見せる」「笑う」など顔の動作に関するものは41例で、「両手をひろげる」「取り出す」など手の動作は24例である。一方、「コウ」は22例中、「見る」「視線を落とす」「笑う」など顔の動作は9例で、「手を当てる」など手の動作は5例である。

参考文献

- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』(3), pp. 85-116
- (1992)「日本語の指示詞研究史から/へ」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房, pp. 151-192
- 佐久間まゆみ(2002)「接続詞・指示詞と文連鎖」『複文と談話』岩波書店, pp. 119-189
- 張子如(2014)「小説における指示副詞「コウ」「ソウ」の後続表現——発話動詞・思考動詞に係る場合——」『表現研究』(100), pp. 70-79
- 馬場俊臣(2006)『日本語の文連接表現——指示・接続・反復——』おうふう

はなく「ソウ」が多用されるのである。「別の行動」の場合には、先行の発話・思考の場面が継続しているが、別の行動が後続するため、やや転換性が見られる。この場合に、「コウ」と「ソウ」はともに多く見られるが、「コウ」の場合は先行の発話・思考をとりたてて強調し、それによって、その部分が一つのまとまりをなしている。そのため、後続の別の行動との間に切れ目が生じる。それに対して、「ソウ」の場合は、先行の発話・思考にも後続の別の行動にも焦点を当てず、淡々と継起的な行動として叙述されるのである。

5. まとめ

本稿では、小説の地の文における指示副詞「コウ」「ソウ」に発話・思考動詞「て」形が後続する場合に、「て」の直後の内容と先行の発話・思考との関わりについて考察した。「コウ」には「移動行動」「別の行動」が後続しやすく、特に「出ていく」「行ってしまう」のように、発話・思考の主体が遠ざかる移動行動と共起することが多い。「コウ」は場面転換ないし場面の終結と強く関わっている。一方、「ソウ」には「発話・思考の説明」「発話・思考行動の続き」「別の行動」が後続しやすい。これらの場合は、発話・思考の場面が継続しており、行動の継起、または補足的な説明が行われているのである。つまり、「コウ」は現場的に内容を取りたてて強調し、場面転換を促すのに対し、「ソウ」はそのような場面転換が少なく、行動の継起、または補足的な説明などが後続しやすく、場面継続の用例が多いと考えられる。「コウ」に見られる場面転換の傾向と「ソウ」の場面継続の傾向は、拙稿（2014）の「た。」の場合について考察した結果と一致している。すなわち、文脈において、「コウ」がまとめる機能を持ち、場面転換に用いられやすいのに対し、「ソウ」は継続させる機能を持ち、場面継続に用いられやすいのである。

注

① 調査資料はすべて『新潮文庫の100冊』に収録された小説で、以下の通りである（総計30編、約228万字）。

1. 「こころ」（夏目漱石、1914年）、2. 「山椒大夫」（森鴎外、1915年）、3. 「高瀬舟」（森鴎外、1916年1月）、4. 「鼻」（芥川龍之介、1916年2月）、5. 「芋粥」（芥川龍之介、1916年9月）、6. 「赤西蠣太」（志賀直哉、1918年9月）、7. 「小僧の神様」（志賀直哉、1920年1月）、8. 「売色鴨南蛮」（泉鏡花、1920年）、9. 「痴人の愛」（谷崎潤一郎、1924）、10. 「ある心の風景」（梶井基次郎、1926年）、11. 「冬の日」（梶井基次郎、1927年）、12. 「雪国」（川端康成、1935年）、13. 「路傍の石」（山本有三、1937）、14. 「ビルマの豎琴」（竹山道雄、1947年）、15. 「二十四の瞳」（壺井栄、1952年）、16. 「あすなろ物語」（井上靖、1953年）、

以上のように、移動行動である場合、「コウ」は「～てしまう」「～ていく」のような表現が後続し、人物が発話の場所から遠ざかり、発話・思考の場面が終結する場合に用いられやすい傾向がある。それに対して、「ソウ」も発話・思考の場面が終結する場合に用いられることがあるが、【表3】bのように、「来る」「～てくる」のような表現を後続し、発話・思考行動がなされる前にすでに提示された場所に近付き、場面が継続することもある。

4. 「コウ」に見られる場面転換の傾向と「ソウ」に見られる場面継続の傾向

3.4で見たように、「コウ」には場面転換を示す移動行動が後続しやすく、特に発話・思考の主体が主人公のいた場所から遠ざかり、場面の終結に用いられやすい傾向がある。そしてその傾向は移動行動の種類と関わっている。ところで、なぜ「コウ」には場面転換を示す移動行動が後続しやすいのだろうか。また、なぜ「ソウ」の後続内容には移動行動が少ないのだろうか。その原因は「コウ」と「ソウ」の性質にあると思われる。

金水・田窪（1990）は、話し手からの心理的距離に関して中和的な「ソ」に対して、近称の「コ」が明らかに文脈指示では有標であり、何らかの強制的な効果をもたらすと指摘している。日本語のテキストにおいては、「ソ」は使用頻度が「コ」より高く、表現の基調となりやすいため、無標の表現となりやすい。一方、「コ」は使用頻度が「ソ」より低いため、有標となりやすく、強制的な効果が生じると考えられる。

3.1で取り上げたように、「コウ」にはその発話・思考を現場的な立場からとりたてて強調する特徴が顕著である。「コウ」はこのような有標性という性質から、その発話・思考の部分の内容にまとまりをつける機能を持ち、その部分をマーカーを付けたように目立たせる。先行内容にまとまりが生じた結果、後続内容とのつながりが相対的に弱くなり、場面転換もそこで起こりやすいのである。そのため、表現としては、「出ていく」「行ってしまう」のような移動行動によって発話・思考の主体が遠ざかり、場面の終結が発生しやすいという特徴も見られた。それに対して、「ソウ」は無標で、ただ前後を連結し、文脈を継続させるのであり、そのため、場面が継続する場合に多く見られるのである。場面の転換に用いても、「コウ」のようにその部分の内容を強調してまとめるのではなく、前の内容と後の内容を連結するのみである。

「移動行動」以外の三つの場合については、次のようなことが考えられる。「発話・思考の説明」の場合は、場面が停止し、「発話・思考行動の続き」の場合は、発話・思考の連続で場面が継続している。これらの場合には、場面の転換がないため、「コウ」で

とある。発話者である客は主人公の仙吉のいた場所から遠ざかり、移動行動によって発話の場面が終結する。その後の内容は、改行して次の段落に入り、仙吉の食べる場面に移るのである。(10)の子供は「こう断って」の直後は発話の場所から「駆け下りて行った」で、主人公の一人である先生のいた場所から遠ざかることによって発話の場面が終結する。「コウ」の大部分(22例中の16例)は(9)(10)の「～ていく」「～てしまう」のような場面の終結を示す移動行動と共起している。

「ソウ」においても a の場合、すなわち「～ていく」「～てしまう」の例が10例見られるが、「コウ」とはどのように異なるのであろうか。次の例を見てみよう。

- (11) 信夫はむずかしい顔になった。貞行と菊はだまって、やさしく信夫を見守った。

「あしたから来ますからね」

そういって、菊はその夜帰って行った。(三浦綾子「塩狩峠」)

菊は「そういって」の後に「帰って行った」であり、菊が発話してから主人公の信夫のいた場所から遠ざかるのである。次は新しい段落に移り、貞行の菊についての思い出の場面に移る。この例では(9)(10)と同様に移動行動によって発話の場面が終結するが、もし「コウ」と置き換えて「こういって、菊はその夜帰って行った」となると、場面を終結する点に同じであるが、「ソウ」に比して発話に対する強調が生じる。すなわち、「コウ」は強調性を持ち、発話を強調している点に「ソウ」との相違が見られると考えられる。

次に、「コウ」に例がなく、「ソウ」にのみ例がある b の場合の例を見てみよう。

- (12) オシゲはズボンのポケットから拳銃を取り出し、それを空に向けた。

「よせ！」

思わず鮎太が叫ぶと、

「射ちはしないわよ」

そう言って、拳銃を両手に捧げるようにして、鮎太の方へ近寄って来た。鮎太は自分の方に真直ぐに向けられているオシゲの、半月月光に照らされている顔に思わず見惚れた。(井上靖「あすなろ物語」)

オシゲは「そう言って」の後は「鮎太の方へ近寄って来た」という移動行動である。それによって、主人公の鮎太のいる場所に近付き、オシゲと鮎太の会話の場面が継続している。このように、b の場合は、「ソウ」が「来る」「～てくる」のような主人公のいる場所に近付く例は総計 8 例であるのに対し、「コウ」はこのような例が見られない。b は、発話・思考の主体が主人公と離れた場所で発話してから近付いてくる場合であるため、その発話に近称の「コウ」が用いられにくいのであろうと考えられる。

「コウ」は22例で全体の43%を占めているのに対し、「ソウ」は20例で、全体のわずか9%である。

移動行動の方向によって、先行の発話・思考の場面との場面転換の仕方も異なると考えられる。先行の発話・思考の場面から移動する方向によって移動行動を次のa b cの3種類に分けてみる。

- a 人物が主人公のいた場所からの遠ざかり：「出ていく」「行ってしまう」のように、発話・思考の主体が主人公のいた場所から遠ざかる場合
- b 人物が主人公のいる場所への近付き：「来る」「～てくる」のように、発話・思考の主体が主人公のいる場所に近づく場合
- c その他：「走る」「通る」のように移動行動の方向や到着が明確でない場合

この基準にしたがって、「コウ」22例、「ソウ」20例を分類すると、【表3】のような結果となる。

【表3 移動行動である場合の「コウ」「ソウ」】

	a	b	c	合計
コウ	16	0	6	22
ソウ	10	8	2	20

【表3】に示したように、「コウ」において、aは16例bは0例cは6例であるのに対し、「ソウ」においては、aは10例bは8例cは2例である。つまり、「ソウ」はa b cの3種類にわたって用いられるのに対し、「コウ」はaの場合に偏っている。

まず、「コウ」において、最も例の多いaの場合の例を挙げる。

- (9) 「私は先へ帰るから、充分食べておくれ」こう云って客は逃げるように急ぎ足で電車通の方へ行ってしまった。

仙吉は其処で三人前の鮓を平げた。餓え切った痩せ犬が不時の食にありついたかのように彼はががつと忽ちの間に平げてしまった。(志賀直哉「小僧の神様」)

- (10) 先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。「おっかさんにそう云ってくれ。少し此所で休まして下さいって」
小供は伶俐そうな眼に笑を漲らして、首肯いて見せた。
「今斥候長になってるところなんだよ」

小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駈け下りて行った。犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追いつけた。(夏目漱石「こころ」)

- (9)の客は「こう云って」その後、「逃げるように急ぎ足で電車通の方へ行ってしまった」

えられるため、現場性の強い「コウ」を用いていると考えられる。この現場的・解説的に捉えるという点において、(5)の「そう」との相違が見られる。

このように、後続内容が発話・思考の続きである場合は、先行の場面が継続しており、「ソウ」がより多く用いられるのに対し、「コウ」はほとんど用いられないのである。

3.3 「別の行動」である場合

発話・思考行動の発生後に「笑う」「見る」「泣く」など具体的な行動が継起する場合である。この場合、「ソウ」は130例（61%）で、「コウ」は22例（43%）であり、両者とも高い比率を占めている。

(7) オシゲが答えると、男は、

「持って行けよ」

そう言って、ポケットから何枚かの紙幣を取り出した。オシゲは近寄って行く
と、(略)戻って来た。(井上靖「あすなろ物語」)

「そう言って」の直後に「紙幣を取り出す」行動が行われており、前後の行動は「男」という同一人物の継起的な行動である。後続の行動が先行の発話・思考と同じ場面で行われているため、場面転換が見られないが、次の行動への展開が見られる。

次に「コウ」の例を見てみよう。

(8) 厨子王は云った。「わたくしは陸奥椽正氏と云うものの子でございます。(略)

わたくしの持っている守本尊はこの地藏様でございます」こう云って守本尊を出して見せた。(森鷗外「山椒大夫」)

厨子王は「こう云って」の後に、「守本尊を出して見せた」とある。発話して次の行動を取る。この場合は(7)の「ソウ」の場合と似ており、発話・思考行動の次に同一人物の別の行動が行われ、継起的な行動である。ただし、3.1で既に述べたように、(7)の「ソウ」に対して、(8)の「コウ」は厨子王の発話（行動と内容）を現場の人物（師実）の視点から現場的・解説的に捉えられたものである。

その後続の行動として、「コウ」と「ソウ」はいずれも「見る」「笑う」のような顔の動作と「取り出す」「手を当てる」のような手の動作に関わる例が多く^⑥、同じ場面で発話・思考に継起する行動が表されるのである。ただし、別の具体的な行動によって次の行動に展開する点に、やや転換性が認められる。

3.4 「移動行動」である場合

発話・思考の後に、「出る」「行く」のような場面転換を伴う移動行動が後続する場合、

的に捉えるのではないかと推測できる。この小説以外では、「コウ」は上記の(4)の1例のみであり、用例が極めて少ない。

「て」の後続内容が発話・思考の説明である場合は先行の発話・思考について補って説明するため、場面が停止している。この場合に、「コウ」と「ソウ」はともに用いられるが、「コウ」はより現場的な立場から発話・思考を強制的に捉えるという特徴が見られる。

3.2 「発話・思考の続き」である場合

発話の後にまた発話が継起し、思考の後にまた思考が継起する場合である。この場合、「ソウ」は26例あるのに対して、「コウ」はわずか1例のみである。

- (5) 「よろしい。今からでは、時日が相当たっているから、はたして効果があるかどうかわかりませんが、とにかく、いちおう、熱海と静岡の駅や宿を調査してみます。女ひとりの行動はあんがわかるものですよ」

三原は、そう言って、

「ほかに何かありませんか？」

「佐山は博多の丹波屋という旅館に、十五日から二十日まで一人で滞在していました。十五日は彼が東京から博多に着いた日です」

と鳥飼は、(略)などを話した。 (松本清張「点と線」)

(5)の三原は「そう言って」また「ほかに何かありませんか？」と発話した。発話の連続である。この場合は、同一人物が連続的に発話するため、同じ場面で行われた継起的な行動である。

一方、「コウ」はわずか次の1例のみである。

- (6) 一人の兵隊はしまいにはいらいらした調子でいいました。

「みな戦争で頭が変になって、神経衰弱になっている。婆さんじゃあるまいし、迷信めいたことをいって、あきらめのわるいことをくどくどくりかえすのは、もうよそう」

この人はこういって、悲しげな声をはりあげて、おこったようにいいました。

「いつまでも生きているの、(略) そんな卑怯な男じゃない！」

(竹山道雄「ビルマの豎琴」)

「こういって」の後は「いいました」があって、また発話して、(6)は(5)と同様に同じ場面にある継起的な発話である。ただし、(6)は「ビルマの豎琴」にある例で、3.1で既に述べたように、語り手が主人公と同じ視点で発話の場面を現場的に捉えていると考

しており、場面転換が見られない。

一方、「コウ」の場合の例を見てみよう。

(4) 私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶しているはずであった。

「何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬する位な人なら何かやっついそうなものだがね」

父はこういって、私を諷した。 (夏目漱石「ころろ」)

父の「こういって」の発話内容は先行の「何もしていないというのは、～何かやっついそうなものだがね」で、直後の「諷した」はその発話内容の要約的な説明である。上記の(3)の「そう」と(4)の「こう」はいずれも先行発話についての説明であるが、どのような違いがあるのだろうか。

金水・田窪(1990)は、指示詞の現場指示用法と文脈指示用法を統一的に分析する理論的枠組みとして談話管理理論を提唱し、その観点からコとソの違いを論じている。この理論によると、文脈指示のコは小説において、「視点遊離のコ」として捉えられる。「視点遊離のコ」とは「小説や体験談などで」、「現場や聞き手などに影響されることなく、話し手の視点を自由に話中の登場人物に近付けることができる。つまり、話の登場人物の目からみて近いと感じられるものをコで指し示す」用法である。金水・田窪(1990)がこの用法は「現場指示の拡張」と述べているように、登場人物の視点から見た現場を指すものであり、強い「現場性」を持つと考えられる。また、文脈指示のコについて、金水・田窪(1992)では、「対象の文脈上での近さ、卓立性等の点で自ずから指示対象に制約のあることは当然予測される」と述べ、文脈指示の「コ」が卓立性を有することを主張している。この理論にしたがえば、ここ「こう」は父の発話を現場的に捉え、かつ発話そのものについて卓立させ強調していると考えられる。これをもし「そう」と置き換えれば、強制的な効果がなくなると思われる。

一見、発話・思考の説明である場合に、「コウ」(12%)と「ソウ」(18%)の比率にはあまり差がないようであるが、「コウ」の(4)の「諷する」以外の5例は「こう言っ」の直後が「論じる」「主張する」「力説する」「ゆづらない」「たのむ」であり、いずれも「ビルマの豎琴」にあるものである。この小説では、「ソウ」に比して、「コウ」の多用が目立っており、さらに、「コウ」に発話動詞が後続する例が圧倒的に多く、全体から見れば、発話を「コウ」でまとめる傾向が強い^④。本作は主人公の体験談的な内容であるため、語り手が「わたし」という主人公のそばに寄り添って主人公と同じ視点で発話の場面を捉えていると考えられる。そのため、発話の場面を現場性の強い「コウ」で解説

のような結果となる。

【表2 「て」形で文が続く場合の後続内容】

	①発話・思考の説明	②発話・思考の続き	③別の行動	④移動行動	合計
コウ	6(12%)	1(2%)	22(43%)	22(43%)	51(100%)
ソウ	38(18%)	26(12%)	130(61%)	20(9%)	214(100%)

【表2】に見られるように、「ソウ」において、最も多いのは「別の行動」の場合(130例)で、「発話・思考の続き」(26例)と合わせて、全体の73%を占めている。この二つの場合はともに行動の継起を表しており、「ソウ」は行動の継起が後続しやすいことが分かる。また、「発話・思考の説明」は38例(18%)で、「移動行動」は20例(9%)のみである。要するに、「ソウ」の後続内容は、同じ場面にある行動の継起または発話・思考についての説明を表すものが多い。一方、「コウ」において、最も多いのは「移動行動」と「別の行動」の場合で、両者とも22例で、それぞれ全体の43%を占めている。前者は「出る」「行く」など移動行動によって場所が変わり、場面転換が発生しやすい場合で、後者は行動が継起する場合であり、「コウ」は場面の転換や行動の継起が後続しやすい傾向が見られる。

以下は発話・思考動詞「て」形の後続内容を種類ごとに具体的に分析し、「コウ」と「ソウ」が場面転換においてどのように異なるのかを検討していく。

3.1 「発話・思考の説明」である場合

発話・思考行動の直後に、その発話・思考についての説明や注釈が見られる場合である。この場合、「ソウ」は38例(18%)、「コウ」は6例(12%)で、比率から見ればあまり差がない。しかし、内容上から両者の異なるところがうかがえる。

- (3) ある土曜日の午後、信夫は隆士に誘われた。隆士と歩くのは、信夫は好きだった。だが、このごろは花見も祭りも格別楽しくはなくなった。

「勉強があるから」

信夫はそうってことだった。

「ふむ」

隆士の顔は西郷さんのようだと信夫は思う。(三浦綾子「塩狩峠」)

信夫の「そうって」の発話内容は先行の「勉強があるから」であり、隆士の誘いを断わる意味の内容である。直後の「ことだった」は発話以外の別の新たな行動ではなく、先行の発話の趣旨を説明したものである。このような場合は、発話・思考の場面が停止

「出て行った」で、場面転換を伴う発話者の移動行動であり、発話の場面から別の場面へ変わっていくのである。それに対して、「そう言って」の後続内容は「奥さん、～気をつけないと不可ません」という金子の発話で、「て」の前後は金子の連続的な発話であり、発話の場面が継続しているのである。

上記の例では、「コウ」の場合は、「て」の後の内容は先行発話とは場面転換が起こるが、「ソウ」の場合は場面転換が起こらず、同じ場面で発話が継起している。この2例の比較に見られるような「コウ」と「ソウ」の相違が後続表現の「て」形全体においてどの程度一般的に見られるのか検討する必要がある。

発話・思考動詞「て」形の後続内容を考察するにあたっては、「た。」の場合の基準^②に従う。ただし、本稿の「て」形の場合は、「て」から文末までの後続内容に発話・思考の行動主体以外の人物の行動や状態などが見られず、すべて発話・思考行動の主体の行動または先行発話・思考についての説明である。そのため、「た。」を検討する際に設けた基準のうち、用例のない項目については、記載しない。なお、「て」から文末までの後続内容のうち、3例は「て」の後続動詞にさらに「と」「が」が続く複雑な文^③であるが、本稿では煩雑を避け、「と」「が」より以前の内容を見る。

ここでは主体の行動や説明をより細かく観察するために、動詞をその性質・内容によって【図1】の4種類に分けて分析する。

【図1 「て」の後続内容と先行の発話・思考行動との場面の転換性】

弱い ↓ 転換性の強さ ↓ 強い	① 発話・思考の説明（語り手による発話・思考の注釈） ② 発話・思考の続き（たとえば、発話行動の直後にまた発話する） ③ 別の行動（「見る」「笑う」「泣く」など具体的な動作） ④ 移動行動（「行く」「来る」「出る」など移動を表す行動）
------------------------------	--

【図1】の4種類はいずれも先行の発話・思考についての説明あるいはその発話・思考の主体の行動である。①は発話・思考内容についての説明であるため、先行の発話・思考の場面が停止している。②③④は発話・思考に継起する行動を表す内容である。②と③の継起的な行動は同じ場面で行われるものであるが、②は発話・思考の連続で、③は別の具体的な行動によって次の行動が展開し、やや転換性が見られる。ただし、③は発話・思考の直後の行動なので、大きな転換がない。それらに対し、④は移動行動であるため、場所が変わり、それによって場面転換も発生すると考えられる。すなわち、これらは①から④に近づくにつれて、場面転換の強さが高くなると考えられる。

上記の分類をもとに、発話・思考動詞「て」の後続内容を調べると、以下の【表2】

ウ」は非終止用法に多く用いられ、文や文脈を続ける働きが強いと考えられる。また、「コウ」に後続する発話・思考動詞の出現形式において、最も多いのは終止用法の「た。」(64例)であるのに対し、「ソウ」において、最も多いのは非終止用法の「て」(214例)である。このように、「コウ」と「ソウ」に後続する発話・思考動詞の形式では、おのおの「た。」「て」へ偏る傾向が見られる。「た。」と「て」それぞれの形式で、場面の転換性において「コウ」と「ソウ」はどのように異なるのか検討する必要がある。

拙稿(2014)は、「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞が「た。」形で文を終止する場合を考察し、「コウ」はまとめる機能を持ち、場面の転換に用いられやすいのに対し、「ソウ」は継続させる機能を持ち、場面の継続に用いられやすいことを明らかにした。本稿では、「コウ」「ソウ」の後続表現の中で、「て」形で文を続ける場合を取り上げ、その「て」形以後文末までの内容を分析する。特に場面の転換性において「コウ」と「ソウ」はどのように異なるのか、考察したい。

3. 「コウ」「ソウ」+「発話・思考動詞+て」の後続内容

本稿で取り上げる「て」で文を続ける場合は「た。」の場合と違い、一文が続いているため、「て」以後文末までの内容と先行の発話・思考の場面との関わりが強いと考えられる。ただし、拙稿(2014)を踏まえれば、「コウ」と「ソウ」において、「て」前後の場面のつながり方の傾向が異なっている可能性がある。たとえば、次のような例を見てみよう。

- (1) 二郎は小屋に這入って二人に言った。「父母は恋しゅうても佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢いたいなら、大きゅうなる日を待つが好い」こう云って出て行った。(森鷗外「山椒大夫」)

- (2) 学生服に白い襷をかけた金子は、誰の眼にも強そうな兵隊に見えた。

「強そうね。でも余り無茶をしては駄目よ」

信子が言うと、

「大丈夫です。生れつき臆病だから、背後の方で小さくなっています」

そう言って、

「奥さん、元気で、いつまでもあの家にいて下さい。冬、よく風邪をひくでしょう。気をつけないと不可ません」

しんみりと彼は言った。

(井上靖「あすなる物語」)

「こう云って」と「そう言って」は一見機能が同じように思われるが、発話・思考動詞とその後続の文末までの内容との関わりを考察すると、「こう云って」の後続内容は

ウ」と「ソウ」に後続し、発話・思考に関わる表現も含めて発話・思考動詞と見なす。具体的には以下のようなものである。「コウ」は、総計160例で、上位から挙げると「言う（いう・云う）」（130例）、「思う」（10例）、「訊く（聞く）」（3例）、「言いかける」（2例）、「呟く」（2例）、「言い終わる」「言いつける」「聞き返す」「聞こえる」「決める」「繰り返す」「答える」「断る」「囁く」「説明する」「注文する」「怒鳴りつける」「怒鳴る」（各1例）である。それに対して、「ソウ」は、総計764例で、上位から挙げると「言う（いう・云う）」（504例）、「思う」（142例）、「考える」（20例）、「答える」（7例）、「信じる（信ずる）」（6例）、「言い捨てる」（5例）、「感じる」「訊く（聞く）」（各4例）、「諦める（あきらめる）」「気が付く」「知る」「呟く（つぶやく）」「呼ぶ」「分かる」（各3例）、「言い終わる」「云いかける」「言い張る」「教える」「覚える」「語る」「決心する」「口に出す」「叫ぶ」「叱る」「説明する」「読む」（各2例）、「言い聞かせる」「言い切る」「言い残す」「言い放つ」「思い込む」「思い定める」「思いつく」「おもい始める」「解釈する」「語り合う」「詰問する」「決める」「切り出す」「決断する」「結論をあせる」「自問する」「唱道する」「心配する」「すすめる」「宣言する」「たしかめる」「たずねる」「黙る」「断言する」「断念める」「直感する」「どなりつける」「返事する」「報告する」「補足する」（各1例）である。

2. 「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞の表現形式

【表1】は日本の近現代小説に含まれる「コウ」「ソウ」の後続発話・思考動詞の表現形式を終止用法と非終止用法の諸形式に分類して示したものである。なお、本稿では、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』に収録された小説^①を資料とした。

【表1 「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞の形式】

	終止用法						非終止用法											合計				
	た。	ていた。	基本形。	のだ。	その他	小計	て	てから	と	ながら	連用形	連体形	が	ば	だけで	まま	ても		きり	のは	その他	小計
コウ	64	0	0	5	4	73	51	0	6	1	1	20	0	3	0	0	3	0	0	2	87	160
ソウ	102	6	9	14	28	159	214	23	113	42	9	71	27	18	8	7	11	4	16	42	605	764

【表1】に見られるように、「コウ」160例中に、終止用法73例、非終止用法87例であり、数量的にはあまり差が見られない。それに対して、「ソウ」764例中、非終止用法605例、終止用法159例と、非終止用法が終止用法の4倍近くにのぼる。ここから、「ソ

小説における指示副詞「コウ」「ソウ」の後続内容

——「発話動詞・思考動詞＋て」に係る場合——

張 子 如

1. はじめに

指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」については文法的・文章論的な研究が多く見られるが、指示副詞「コウ」「ソウ」の考察は少ない。

「コウ」「ソウ」の機能差に関する研究として、佐久間（2002）と馬場（2006）の考察が挙げられる。佐久間（2002）は文章・談話の文脈展開における統括機能という観点から「コ系の文脈指示詞」が「広域の機能領域を強調して指し示し、大きな統括力を有する」のに対し、「ソ系の文脈指示詞にも、ある程度は段の統括機能があり、統括力は相対的に弱い」ことを指摘している。また、馬場（2006）は「こうして」の場合は結果性の意味が前面に出、「そうして」の場合は継起性の意味が前面に出るという違いがあるとしている。さらに、金水・田窪（1990）は談話管理理論の立場から、心的領域を直接経験的領域と間接経験的領域に二分し、「コ」は直接経験的領域、「ソ」は間接経験的領域に属すと指摘し、特に小説の「コ」の用法を「視点遊離のコ」として人物視点に関わる面を論じている。

これらの研究を承けて、拙稿（2014）は小説テキストにおいて、「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞が「た。」形で文を終止する場合を取り上げ、後続内容を分析することによって「コウ」と「ソウ」の機能を考察した。本稿では、「コウ」「ソウ」の後続発話・思考動詞が「て」形で文を続ける場合を取り上げ、「て」以後文末までの内容が「て」の前の発話・思考の場面を継続するか転換するかを分析し、「コウ」と「ソウ」のまとめる機能の相違について考察する。本稿では、指示副詞「コウ」「ソウ」の用例中、特に多く見られる発話・思考動詞が後続する場合を対象として文章論的観点から考察する。筆者の調査によれば、「コウ」「ソウ」が動詞に係って副詞として機能する場合に、「コウ」では73%、「ソウ」では90%が発話・思考動詞に係る。つまり、発話・思考動詞が全体を占める比率が非常に高いためである。なお、発話・思考動詞は「言う」「思う」など発話・思考を表す動詞を指す。本稿では、これらのみならず、文脈上「コ